

Title	現代かくれキリシタン考 - 長崎県生月島の信仰民俗誌を中心に -
Author(s)	小泉, 優莉菜, Koizumi, Yurina
Citation	
Date	2017
Type	Thesis or Dissertation
Rights	none

氏名	小 泉 優莉菜			
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）			
学位記番号	博甲第 219 号			
学位授与の日付	2017 年 3 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
学位論文の題目	現代かくれキリシタン考 —長崎県生月島の信仰民俗誌を中心に—			
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授	佐 野 賢 治
	副査	神奈川大学	教授	小 熊 誠
	副査	神奈川大学	教授	田 上 繁
	副査	国立歴史民俗博物館	准教授	内 田 順 子

【論文内容の要旨】

本論文は、現代におけるかくれキリシタン信仰が、「現在、どのような姿」を見せ、「なぜ、現在の姿」を展開しているのかを、現地における信者・元信者の証言や回想、儀礼行事の参与観察に基づき詳細に記録・記述し、その民俗誌から信仰形態の変化や信仰観についての分析を試みたもので、3部9章構成と資料編からなる。

第1部では、かくれキリシタン信仰についての歴史的、社会的概説を述べた上で学説史を検討、「かくれキリシタン」の視角から論を展開する立場を明らかにする。現時点での信仰実態をできる限り多角的に記述し、現代社会で生活を営む信者における「かくれキリシタン」の意味を問う。

第2部では全体を3章に分け、生月島の壱部・山田・堺目地区のかくれキリシタン信仰に関する聞き取り調査による詳細な民俗誌を作成、その信仰の中核をなす「おらしょ」・「唄おらしょ」の伝承実態などを記述する。地区ごとの信仰組織の在り方、行事の司祭役「御前様」の役割、「おらしょ」・「唄おらしょ」の信者による解釈などが明らかにされる。また、かくれキリシタン信仰以外の神仏に対する意識の有り方が、伝統行事「おくんち」における神職と巫女によって舞われる芸能とその音楽に着目することなどにより考察される。

第3部では1、2章で論じた生月島以外の地域におけるかくれキリシタン信仰として長崎市外海地域の事例を取り上げ、信仰行事の次第が信仰組織ごとに相違することの意味を指摘する。ここでは信仰行事内で使用され「貴いもの」と考えられている聖具が、民具研究の道具としての扱いや女人禁制のタブーあり方などから分析される。加えて、従来の研究にはない新たな視点として「御前様」に供える「御膳」、物質文化に注目する観点からの分析もなされる。

第3章では現在のかくれキリシタン信仰にとって重大な新局面となる「世界遺産登録推進運動」の是非をめぐっての信者の対応を問題とする。かくれキリシタン信仰は論文執筆時点では、世界遺産登録活動の最中であり、イコモスからの申請取り下げ勧告を受けている状態である。その理由は、「弾圧期の歴史的背景の調査が足りない」というものであった。これまでのかくれキリシタン信仰の研究では史資料の厩少もあり、潜伏期の信仰活動についてはほとんど言及されてこなかったが、本論文ではイタリア国立マルチャナ図書館蔵の江戸期に潜伏していた宣教師たちが本国ローマに

送った書簡の現地調査を行い、弾圧当時の文書からその実態の一端を解明し、その資料を提示した。

最終章では 21 世紀における長崎県下のかくれキリシタン信仰の信仰形態・信仰観をまとめるとともに、かくれキリシタン信仰の保存・研究の必要性を指摘する。現代のかくれキリシタン信仰には、「おらしょ」・「唄おらしょ」のように伝来当初の要素だけではなく、時代ごとに添削されたさまざまな要素が複合的に存在しており、それらが人々の生活様式に即する形で、同一平面上で今日まで伝承され持続しており、国内外の史資料にあたり、ジャンル横断的な研究が今後さらに求められるとした。

【論文審査の結果の要旨】

論者は国立音楽大学で声楽を専攻、民族音楽に興味を持ち、卒業論文では「かくれキリシタンのおらしょ」に取り組み、その伝承の背景を究明するために、本歴史民俗資料学研究科に進学、その視角、方法論を学び修士論文でさらに関心を深め、本論として結実させた。

本論文の評価される点は、第一に、かくれキリシタン信仰の現地に何度も足を運び、仕事を手伝うなど信者、地元住民とのラポール（人間関係）を確立し、従来、男性研究者が見逃してきた御用着物、供え物、血忌みなど聞きづらい事柄をも聞き書きし、また、信仰儀礼、伝統行事方面では可能な限りの参与観察を行い精細な信仰民俗誌を作成、それを踏まえて立論したことである。

第二には、かくれキリシタンであることを信者本人が依拠する原点が、「おらしょ」・「唄おらしょ」を唱えることができる、少なくとも覚えていることにあると聞き書き等から導き出した点であり、加えてこの信仰意識の核心にある「おらしょ」・「唄おらしょ」の考察において、著者自身による採譜も新たに実施し、その音階、詞章も含めグレゴリオ聖歌などとの対照、比較を試みた点である。これには音楽学理の知識が必要であり、他の研究者が容易に追従できない音楽分析を行ったといえる。

第三には、従来のキリシタン研究においてキリスト教伝来当時の宣教師の布教活動に比較して手薄であった江戸期における潜伏キリシタンの実態を知るために宣教師文書・書簡の調査研究をイタリア国立マルチャナ図書館において実施し、難解なラテン語、古イタリア語と格闘しつつ、すでに翻訳されたものと対照するとともに、そのいくつかを翻訳し、新たに資料として提示したことである。

以上のように、本論は本人の持てる実力を総動員し、消滅の危機にあるともいえる「かくれキリシタン」信仰に対し、現時点での詳細な信仰民俗誌を作成し記録・記述して残すとともに、その持続してきた理由を究明し、将来に向かっての継続、ほだ火の残り具合を見極めようとの強い思いに支えられ書き進められた論考である。それ故に、大きく言えば自身の調査研究の立場を客観視する視角が求められる点が、文中の学術用語の使用や言葉の定義の不統一はじめとしてままたり、今後の対処、改善が望まれる。

いくつかを指摘するとまず、「かくれキリシタン」の定義について、隠れキリシタン、潜伏キリシタンなどとの表記も含め、先学による定義にあえてよらない理由が本書では明確に述べられていない。著者の基本的立場は、「かくれキリシタン」を外来宗教であるキリスト教と土着信仰である民俗信仰との文化接触・摩擦・受容・変容の過程を経て習合した「キリスト教民俗」ととらえていることは了解できるが、その交渉過程、地域社会における信仰体系の中での位置づけ・機能など具体的説明とともに、平仮名での「かくれ」の意味付けがいまひとつ欲しい。

それは潜伏する必要がなくなった明治期の高札撤去後のかくれキリシタンの性格付けとも関係してくる。また、語義一つとっても、著者が「神道」を民族宗教というとき、国家神道としてか民俗信仰的な意味合いでで使用しているのかあいまいである。「宗教」、「信仰」などの基本的な語意についても自身なりに定義して使用する必要がある。民具、聖具、道具（125頁）など、用語が定まっていない点も気になる。

筆者による「おらしょ」・「唄おらしょ」についての音楽分析は小泉文夫の民族音楽論を援用し、「唄おらしょ」が律音階で構成されることを検証し、グレゴリオ聖歌が長年月の間に日本音楽化したとした。その一方、「おらしょ」中の詞句の一部にホレブ山（シナイ山）などが登場することなどから出エジプト記の詞句の対照が認められるとし、聖書の内容が持続してきたことを指摘したことは本論の大きな成果といえる。しかし、前提となる「音楽を耳で感覚的に覚える」ことは日本独自と筆者は指摘するがグレゴリオ聖歌も、楽譜によるだけでなく、口頭による伝承によって支えられてきたのであり、短絡的に結論することは避けなければならない。また、「唄おらしょ」を日本音楽として分析した本論文の立場をより確固のものとするためには、当該地域のわらべうたや民謡、念仏の音階構造との比較などの手続きが必要ではないかと考えられる。

本論文で訳出されたイタリア国立マルチャナ図書館所蔵の宣教師通信文書の多くは『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の抄訳で確認できる。したがって、本論文における全訳は、新たに明らかになった事実を明確に指摘することにより高く評価される。西洋古典学の適切な史料批判を経ることが必要になるが、マルチャナ図書館所蔵資料の来歴、保管状況の紹介なども書誌学的には意味がある。1628年にローマで刊行されたイタリア語初版本（国内では京都外国語大学図書館が所蔵）との校合なども将来的には不可欠である。ルイス・フロイスなどの宣教師の通信文との比較対照なども望まれる。

論文の体裁上について一、二注文する。「おらしょ」・「唄おらしょ」の分析などでは楽譜など資料編をいちいち参照するのではなく言及箇所近くに記載し、理解を助ける工夫がほしい。また、「心性の深い部分までの調査も可能となった」とする本論文におけるインフォーマントの語りの表記については、それぞれの注ではなく、凡例をつけ、論文全体で統一したほうがよいと思われる。

いずれにせよ、日本のかくれキリシタンについては、2015年の年頭演説でローマ教皇がカソリック宣教師における海外布教の意義を特に指摘し、また長崎県を中心にユネスコ世界遺産登録に向けての活動が行われている中で、本「かくれキリシタン」研究は大いに注目されるであろうし、よき調査研究モデルを提示していると評価できる。また、将来、隠れ念仏、日蓮宗不授不施派などとかくれキリシタン信仰の比較も俎上に載せてほしい。

以上、本論文には将来に望むべき点、改善点はあるものの、かくれキリシタン信仰に関し、現地信者とのラポール形成に基づく民俗誌の作成、関連する民俗学・宗教学・歴史学・国文学方面の基本文献の読破に加え、論者の音楽学理、音楽史の知見を踏まえた「おらしょ」の詞曲の分析、イタリアにおける宣教師書簡の現地調査による史・資料の博搜、総合化とその分析により、現代にまで持続してきたかくれキリシタン信仰の諸相を学際的・総合的に取り上げた実証内容が本論文では具体的に披瀝されている。現代におけるかくれキリシタンを歴史民俗資料学的視角から学際的に明らかにした労作といえ、博士（歴史民俗資料学）の学位論文にふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。